

研究分野のキーワード：美術教育学，鑑賞，評価，障がい者との芸術活動・支援

### 研究紹介

主な学術的研究は、人が美術鑑賞活動において、その人の思考がどのように変容しているのかを研究し、その結果を教育活動へいかそうとしています。その研究過程でただ単純に美術に関わるのではなく、意識的に関わることによって私たちは、この世界を広く・深く・切実にとられることができることを研究で知りました。私たちは、国語科で文字や言語、算数科や数学科で数学を通して「幸せになる」なるための「術」を学ぶように、図画工作科・美術科では、色や形、イメージを感じて、つくり、みたりなどして幸せになる術を少しずつ身につけていく必要があります。そのための基礎として、アートと怖がらずに向き合う姿勢が必要です。「絵を描くのが苦手」「私はセンスがないから・・・」などといったアートに対する消極的な言葉をよく耳にします。でも本当はファッションや雑貨、日常のデザインに興味があったりしますよね。それらと同じように怖がらずにアートと関わっていくと、この世の中はもっと面白く、自分自身との切実な結びつきのあることと知ることができます。

私は学生時代からこれまで断続的ですが障がい者の芸術活動を支援する活動をしてきました。「支援」というよりは、一緒にアートの活動をして、一緒に幸せを感じてきたといった方が正しいです。この活動を通して感じたことは、アートをすることが生きていく上で選択肢にも入らないと感じている人たちがいることです。「障がいがあるから“アート”なんかできるはずがない」と捉えている人もいます。なので、少しでもアートと怖がらずに関われる社会をつくる研究も始めています。

学校教育における美術教育、障がい者が関わる美術において、私が共通の課題として考えているのは、人が楽しく、切実にアートに関わることです。簡単なことですが、とても難しいことです。



大学での授業の一場面（図画工作科研究）